

紫の上の嫉妬の心について―明石の君と朝顔の姫君に対する―

朴 光華

1

葵巻に、葵の上が男の子（夕霧）を無事に出産した直後、その消息を耳にした六条御息所の苦悩の思いというものが描かれた箇所がある。

かの御息所は、かかる御ありさまを聞きたまひても、ただならず。かねてはいとあやふく聞こえしを、たひらかにもはた、とうち思しけり。^①（葵巻三五頁）

自分、つまり六条御息所があれほど執着する相手である源氏の子を、他の女性、葵の上が生んだことについての御

息所の妬みが出ている場面である。かつては危篤の状態であつたと聞いた葵の上の出産について、「たひらかにもはた（不愉快にもまあ安産であつたか）」と思うところに、六条御息所の嫉妬の心があらわれている。嫉妬の心よりも、むしろ憎悪の心があらわれていたとも言えよう。この箇所は、いわば『源氏物語』における女性の嫉妬の頂点をなす場面としてよく知られているが、紫の上の場合はその嫉妬の心というものがどのような形であらわれていて、またどのように描かれているのか。

紫の上は、若紫巻から御法巻に至るまで登場する女性であつて、その生涯は、源氏とともに生きた一生であるが、実際に藤裏葉に至るまで、紫の上の姿というものはつき

りしていないように感じられるのが確かな事実であろう。そのためであろうか、第一部つまり藤裏葉までの三十三帖において、紫の上は源氏の正妻として認められず、一般に「正妻格」として扱われている。若紫巻において、みずみずしく清新な生の輝きを持って登場した紫の上という女性、その人物について実にいろいろな疑問点が指摘されている。たとえば、

・紫の上は、いわゆる正篇を一貫しての女主人公たりえているか。^②

・若菜巻以下、いわゆる第二部において、なぜ従来の紫の上とは、格段な相違が見られるのか。

・蓬生巻に至ってはじめて「二条の上」「対の上」の呼称で呼ばれるようになったが、「対の上」という呼称は源氏の正室ではないことを示す言葉ではないか。

・作者は、源氏の最愛の紫の上には、なぜ一人の子供も儲けずにしてしまったのか(紫の上に子供がいな
いということは、「藤壺のゆかり」ということと共

に、彼女の最大の特徴としてあげられる。また、紫の上に子を与えなかったのは、作者が彼女に安定した地位を与えることを欲していなかったからであろうか。

などである。このような疑問点をふまえながら、紫の上の登場の意味と嫉妬の心、その嫉妬の心のうち、主に明石の君と朝顔の姫君に対する嫉妬の心を中心に触れることにしたい。

2

若紫巻、北山の聖のもとにわらわやみ瘡病加療に出かけた十八歳の源氏によって発見された美少女として、紫の上はまず登場する。

きよげなる大人おとな二人ばかり、さては童わらわべぞ出で入り

遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、
山吹などの萎^なえたる着て、走り来たる女子、あまた見
えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見
えてうつくしげなる容貌^{かたち}なり。(若紫卷二八〇頁)

十八歳春(三月)、源氏は瘡病^{わらわやみ}に悩まされ、北山のなに

がしの寺(『河海抄』以来、鞍馬寺と指摘されてきたが、
諸説がある^③)へ出かけることになる。その北山の僧都の僧
坊をかいま見て、十歳ばかりの少女を見出すことになるが、
それがのちの紫の上である。少女の容姿が、成人の後がさ
ぞかし思いやられて、見るからにかわいらしい顔たちであ
ったが、まだ十歳ばかりの少女であつたせい、源氏の関
心を強くひきつけるような存在ではなかつたのである。と
ころが、「さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、い
とよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり。」(二八一
・二八二頁)と、実は限りなく深い思いを申しあげる人(藤
壺)によく似ていたからで、心が強くひかれたのであつた

(藤壺と紫の上は叔母と姪の関係)。そのうえ、

何人ならむ、かの人の御かはりに、明け暮れの慰めに
も見ばや、(若紫卷二八四頁)

とまで思う源氏であつた。そして、

さらば、その子なりけり、と思しあはせつ。親王^{みこ}の御
筋にて、かの人にも通ひきこえたるにやと、いとどあ
はれに、見まほし。人のほどもあてにをかしう、なか
なかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へ
生^おほし立てて見ばや、(若紫卷二八七、二八八頁)

と僧都から、この少女が「藤壺のゆかり」と聞かされた源
氏は、ますます執心を深め、尼君や僧都に少女を引きとつ
て親代わりに教育し、理想的な妻に仕上げたいと要望する
のであつた。

右のようないくつかの箇所が、紫の上の登場について語

るとき、しばしば引用される部分である。周知のとおりに、紫の上の登場というものは、源氏の思う人の形代としての登場であった。先に、紫の上は若紫巻においてみずみずしく清新な生の輝きをもって登場したと触れたことがあるが、しかしその登場のうらには、存在のあやうさはかなさというものがかくれていたのではないだろうか。それは、紫の上は残念ながら正妻の子ではないし、後見がないこと（実母は早世し、祖母北山の尼君の手で育てられるが、まもなく祖母と死別する。以後、誘拐同様の手段で二条院に迎え取ることになる）や、源氏との愛情のみが彼女の地位を支えるものであることなどがそれである。たとえば、のちに登場する女性、朝顔の姫君、女三の宮などが（明石の君をのぞいて）、あまりにも高貴な女性であつて、その登場によつて紫の上の地位というものが、あやうくなることさえもある。しかし、一方では、源氏の藤壺思慕の代替、つまり「藤壺のゆかり」として登場させられた紫の上には、むしろこの「藤壺のゆかり」というものが彼女の生涯のわたつてかなり有利な点として作用したとも言えよう。それ

は、当時の正式な結婚が、出自や家格によつて決められるという社会風習のなかで、源氏をめぐる女性たち、とくに六条御息所や、朝顔の姫君、女三の宮などの高貴な女性のなかから、源氏のいちばん理想的な愛妻となるためには、源氏が生涯において求めてきたこの「藤壺のゆかり」というものが、かなり有利な点として作用したのであろう。

では、右のような存在のあやうさはかなさというものを念頭におきながら、まず明石の君に対する嫉妬の心からみていきたい。

3

紫の上と明石の君、二人の登場はあいにく若紫巻という同じ巻であるが、紫の上が明石の君の件について詳しく耳にするのは、帰京した源氏からである。澤標巻で、源氏が明石の君のことを紫の上に問わず語りした箇所がある。それを聞いた紫の上の心中は、「我はまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、すさびにても心を分けたまひけむよ、」（二八

二頁と、紫の上自身は、京でまたとなく悲しい日々で過

ごしたのに、源氏あなたは、明石という地で他の女にも情
けをお分けになつていたのでしようか、というような恨め
しくおだやかならぬ気持になる場面がある。周知のように
この場面をもつて、『源氏物語』における紫の上の嫉妬の
心というものが描かれはじめたと言われている。そして、

源氏が「箏の琴」を引き寄せて、軽く弾いた後、紫の上に
勧めることになるが、紫の上は、「かのすぐれたりけむも
ねたきや、手も触れたまはず。」（二八三頁）という様子で
あった。「かの」、つまり明石の君が「琴の音」にすぐれて
いたことは、源氏から「琴の音のなまめきたりしも、……」
（二八二頁）というように聞いたことがあつて、「手も触れ
ない」というしぐさをする紫の上の態度であつた。紫の上
に嫉妬の心があらわれた時、「手も触れない」というしぐ
さをする紫の上の態度に注目したい。のちにも触れること
になるが、このようなしぐさ（態度）が彼女の性格と深く
つながっているのではないかと思われるからである。続け
て見える紫の上の様子にも、やはり彼女の嫉妬の心があら

われている。

いとおほどかに、うつくしうたをやぎたまへるものか
ら、さすがに執念しふねきところつきて、もの怨うらじしたまへ
るが、なかなか愛敬あいぎやうづきて腹立ちなしたまふを、を
かしう見どころありと思す。（澤標卷二八三頁）

紫の上の嫉妬の心というものが、源氏の視点によつて描
かれた場面である。「さすがに執念きところつきて、もの
怨じしたまへる」、また「腹立ちなしたまふ」という様子
が、源氏には「なかなか愛敬づきて」というように見える。
つまり、紫の上がむきになつて物恨みをするそのしぐさ
（態度）が、かえつて源氏には魅力的に見えるし、おもし
ろくも見えるのである。このような二人において見える愛
情関係が、紫の上の嫉妬の心を理解するとき、基本的なも
のの一つではないだろうか。たとえば、葵巻に、女として
成熟した紫の上を見て、しのび難くなつた源氏が、ついに

紫の上と新枕をかわす場面がある。その後、源氏が声をかけても「いよいよ御衣ひき被きて臥したまふ」(六四頁)という様子、また、源氏が夜具をひきのけると、「汗におし漬して、額髪もいたう濡れたまへり、」(六四頁)という様子、源氏が手を尽くしていろいろ慰めてやるが、「つゆの御いらへもしたまはず」(六四、六五頁)という様子、また、源氏が一日じゅう慰めてやっても、「解けがたき御気色いとどらうたげなり、」(六五頁)というような紫の上の様子などである。つまり、掛けてある召物をかぶって寝てしまう様子、返事もしない様子、慰めてあげても心がほぐれない紫の上の様子など、そのすべての様子が源氏には愛らしく感じられる。このようなしづさをする紫の上の態度とそれに対しての源氏の愛情の表示が、紫の上の嫉妬の心を理解するとき、基本的なものの一つであると考えられる。そして、これらの場面においても、やはり紫の上のしづさ(態度)が彼女の性格と無関係ではないことに注目したい。

先の場面で、紫の上の妬みする様子が、源氏には、「愛敬づきて」と「をかしう見どころあり」というように感じられたわけであるが、実は『源氏物語』において、女性の嫉妬の美德が勧められる記述は、はやくも帚木巻に見える。

すべて、よろづのこと、なだらかに、怨ずべきことをば、見知れるさまにほのめかし、恨むべからむふしも、憎からずかすめなさば、それにつけて、あはれもまさりぬべし。多くはわが心も見る人からをさまりもすべし。(二四四頁)

夫のちよつとした浮気を、憎らしげにみえぬ程度にそれとなく言うならば、男の愛情も増さること、またたいにい男の心も相手の女しだいである、というような馬頭の論がそれである。つまり、先の「手も触れたまはず」様子や、「御衣ひき被きて臥したまふ」という紫の上の憎らしげに見えない様子などが、源氏には魅力的に見えたのであり、

そしてその嫉妬の様子によって、源氏の愛情もだんだん深まっていくようになったと思われる。

以後にも、明石の君に対する紫の上の心は穏やかではなかったが、絵合の時、源氏から須磨の日記絵を見せられ、当時を感動的に偲ぶ場面もある。大堰の明石の君を訪問する源氏に、不満をいづく時もあつたが、源氏から幼い明石の姫君の養育を相談され、それを快諾した以後は、明石の君をも許そうとする。

何ごととも聞き分かで戯れ歩きたまふ人を、上はうつくしと見たまへば、をちかた人のめざましきもこよなく思しゆるされにたり。(薄雲卷四二九頁)

「明日帰り来む」(薄雲卷四二九頁)と口ずさんで、大堰の明石の君を訪問しようとする出かける源氏、その源氏を「女君ただならず見たてまつり送りましたまふ。」(四二九頁)というような気持(嫉妬の心)で見送る紫の上であつた。しかし、その嫉妬も、無邪気に遊んでいる明石の姫君を見ると、「を

ちかた人」、つまり明石の君に関したことも許される気持になつたのである。それから、自分の懐に姫君を入れて、「うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ戯れみたまへる御さま、見どころ多かり。」(四二九、四三〇頁)と、乳房をふくませになつては戯れている紫の上の姿が続いて描かれる。この場面、つまり乳の出ない乳房をふくませる紫の上のしぐさなども、先にも見えた、「つゆの御いらへもしたまはず」や、「手も触れたまはず」などのしぐさとながる態度であると理解したい。それなら、このような紫の上のしぐさ(態度)などから、彼女の性格というものをどのように理解すればいいのか。無邪気な性格、あるいは無垢な性格からあらわれたしぐさ(態度)ではないだろうか。

明石の姫君引き取り後、姫君を養女とすることによつて、紫の上は明石の君への嫉妬の心も和らぎ、かなり明石の君を許せるようになった。紫の上と明石の君との関係において、和解という関係にまで進展するためには、明石の姫君の媒介がある程度必要であつたと思われるが、源氏と紫の上、そして明石の君、三人の愛情というものを結ぶた

めには、明石の姫君の媒介が必然的なものでなければならなかったという意味ではない。また、源氏の愛情が明石の君へ移ったから紫の上の地位に何か変化があったとも思われない。明石の姫君が養女にならなかったにしても、受領階級の出の明石の君では、紫の上の競争相手とはなりえなかったであろう。つまり、紫の上に対する源氏の愛情というものは、源氏が須磨・明石に退去していても変わらなかったことであり、それは物語の筋からいっつか確認できる。

源氏が須磨・明石に退去していた時、紫の上への変わらない愛情というものが物語の随所に見える。そして、その変わらない愛情というものから、当時の紫の上の地位についてもある程度確認できるのではないだろうか。たとえば、須磨下向に際し、全財産の管理を紫の上に委任したのも、その根拠の一つとしてまずあげられる。「さぶらふ人々よりはじめ、よろづのこと、みな西の対に聞こえわたしたまふ。」（須磨巻一六八頁）とあるように、寄る辺ない紫の上の今後の身の上を案じて、邸内所領一切の管理を委ねたの

である。紫の上に対するなみなみならぬ源氏の愛情にもとづいた処置であったと思われる。そして、明石の入道から、その娘（明石の君）の将来について苦慮していることを聞いても、「都の人も、ただなるよりは、言ひしに違ふ^{たが}と思さむも心恥づかしう思さるれば、気色だちたまふことなし。」（明石巻二二七頁）と、明石という地で新しい女性に心移すのは、紫の上に約束したことに違背することになるから、そのような気持をこちらからわざと見せようなどしない源氏であった。このような文脈からも、源氏の紫の上に対する愛情が一応確認できる。しかし、その一方では、「事にふれて、心ばせありさまなべてならずもありけるかな」（二二七頁）という明石の君の気立てや容姿には、心がひかれないうけでもなかったことも事実である。そして、八月十三日の夜明石の君を訪問する折にも、次のようにまづ紫の上が思い出されるのである。

思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ恋しき人の御ことを思ひ出で聞こえたまふに、やがて馬引き過ぎ^{むま}

て赴きぬべく思す。(明石卷二四五頁)

このまま馬を引いて通り過ぎて、都へ行ってしまうたそんな源氏の心情からも、紫の上に対する愛情というものが十分に理解される。そして、明石の君と結ばれた後も、「二条の君の、風の伝つてにも漏り聞きたまはむことは…」(二四八頁)と、この一件を、紫の上が風のたよりにも耳にしたら、紫の上にきつと疎まれるようなことがあるのでしようという記述、また、紫の上への源氏の深い志である「あながちなる御心ざしのほどなりかし。」(二四八頁)という記述からも、源氏の紫の上に対する愛情は変わらなかったと言えよう。くりかえすことになるが、紫の上に対する源氏の愛情は変わらなかったことは確かなことである。ここで言いたいことは明石の君に対する嫉妬の心があらわれた時の紫の上のしぐさ(態度)と、そのしぐさ(態度)に対する源氏の愛情の表示である。私には紫の上のしぐさ(態度)から彼女の性格というものがある程度よめるのではないかと考えられるし、そして、そのしぐさ(態度)が

源氏には魅力的に見えたところに、源氏の最愛の妻という座をもつて紫の上は最後まで生きていったのではないかと考えられる。源氏が須磨・明石に退去していた三年間は、孤独の源氏にとっては、紫の上への愛情を再確認する期間でもあつて、紫の上にとっては留守中のすべての財産管理を通じて源氏の「正妻格」として世間から認められるようにもなった期間でもあつた。

5

次に、朝顔の姫君に対する紫の上の嫉妬の心についてみることにする。朝顔の姫君とは、桐壺帝の弟宮である桃園式部卿宮の皇女で世評が高い女性である。その姫君と源氏との関係を噂で漏れ聞いた紫の上は、

しばしは、「さりとて、さやうならむ事もあらば隔てては思したらじ」(朝顔卷四六八頁)

と、たとえ、その噂、つまり朝顔の姫君と源氏との縁談が事実だとしても、源氏がこの自分に隠し立てをするわけはないだろうと、あくまで紫の上は源氏を信頼しようとするが（源氏が明石の君との関係を隠さずに打ちあけたことがあるから、今回も源氏が打ちあけてくれるだろうと信頼する）、しかし、源氏の態度と照らし合わせて、今回は本気になったのではないかと心配する。そのうえ、「まめまめしく思ひなるらむことを、つれなく戯れに言ひなしたまひけんよ、」（四六八頁）と、その事実を源氏が冗談ごとにごまかしたことにについて、「人知れず思し嘆かる」と溜息をつく紫の上であり、そして、「御心など移りなば、」ともし源氏の心が朝顔の姫君のほうへ移ってしまったら、自分はずさぞ恰好かつこうのわるいことになるだろうと心中穏かでない紫の上であつた。このような源氏と朝顔の姫君との出来事をつらく思いつづける紫の上であつたが、「色にも出だしたまはず。」（四六九頁）と顔色には出さずに、ただ思い悩むばかりの様子であつた。そして、源氏が衣裳に香を焚きしめ、念入りに身繕いをしていながら、「女五の宮の悩ま

しくしたまふなるを、とぶらひきこえになむ」（四七〇頁）とて、女五の宮の見舞いにかこつけて朝顔の姫君を訪れようとする源氏に、「見もやりたまはず。」（四七〇頁）と見向きもしない紫の上の様子であつた。この辺でも、やはり紫の上に嫉妬の心があらわれた時に、そのしぐさ（態度）というものが見える。「色にも出だしたまはず」、「見もやりたまはず」などがそれである。前の「手も触れたまはず」という文脈とほぼ同様な紫の上のしぐさ（態度）であり、そのしぐさ（態度）というところに、また同様な彼女の性格があらわれていたとも言えよう。朝顔の姫君という女性は、桐壺帝の弟宮である桃園式部卿宮の娘という血筋からも、紫の上の妻の座を脅かすに充分な女性であつたが、この恋いは、結果的に朝顔の姫君の拒絶によつてたち消えることになる。不思議なほどにまで思われる、二人の愛情関係であつたが、このあたりで、朝顔の姫君の不自然な登場の意味について若干考えなければならぬ。

「年ごろの御もてなしなどは、立ち並ぶ方なくさすがにならひて、」（朝顔巻四六八頁）と描かれてあるように、今ま

でに源氏の女性関係についてしばしば苦しんできた紫の上であるが、源氏の愛情ということになると、自分には肩を並べる女性もないくらいに過ぎてきた紫の上であった。今回にあらわれた朝顔の姫君は、「同じ筋にはものしたまへど、……」(朝顔巻四六八頁)とあるように、同じ皇族の血筋である。その同じ皇族の女性にあれほど強く嫉妬の心をいだくようになったのも当然のことであろうが、その他紫の上が心配していたことは二つある。その一つは、現在おかれている紫の上の境涯であり、もう一つは、もし源氏と朝顔の姫君との間に子が生まれるのではないか、という危惧の念をいだいていたからではないか。孤児同然であり、何の後見もない。もっぱら源氏の愛情だけを頼りにして現在まで生きてきた紫の上の境涯に、朝顔の姫君のそれとをくらべると懸隔な差が見られるのは確かなことであろう。ところが、紫の上がそれほど心配していた源氏と朝顔の姫君との交際は、幸いに徹底した姫君の拒絶により、何にもなかったように済むことになる。つまり、物語には朝顔の姫君に源氏の懸想を受け入れる気持がまったくな

いように描かれている。これについて秋山虔氏は「まず権宮と光源氏との関係をかたる前半であるが、(中略)この場合たしかに紫上をゆさぶるための方便として登場させられてきたと見てよいのであろう。問題は何のために彼女がゆさぶられるのか、またゆさぶられることが物語の世界でどういう意味をもつのかということであった。(中略)もつとも紫上の苦悩は、結果的には杞憂にすぎなかったわけであるが、」と指摘しているが、もしそのように杞憂であったとしたなら、なぜ、この場面で作者が無理してまで朝顔の姫君を物語に引き入れたのか。源氏の正妻という座に何らかの問題点があったのか、ということが疑問点として浮かび上がる。源氏には葵の上没後、若菜上巻で女三の宮の降嫁までの間は、「北の方」という正妻の座は空白であったようである。そうすると、この場面で作者が朝顔の姫君をわざわざもつてきたのは、紫の上という人物は源氏の正妻にふさわしくないというふうに作者は考えていたからかも知れない。

・正式は婚姻の手続きをしていない(両親認知の正式な婚姻ではない)。^⑤

・しっかりとした後見がない。

などが、源氏の正妻という座になれなかった要因としてあげられる。そんな理由で、物語中に側室の呼称である「対の上」というように呼ばれてきたのかも知れない。葵の上没後、作者にとっては、六条御息所や朝顔の姫君などのように身分や格式のよろいをまとった高貴な女性が、源氏の正妻として有力な人物であったのかも知れない。そのうちのいずれの方が格式があり、紫の上には強敵となる女性であったが、その女性らが何らかの事情で源氏の側から離れる結果となったことは、紫の上にとっては幸運であった。また、後身のないことは、「心を尽くしきこゆる人(藤壺)」に、いとう似たてまつれる」という「藤壺のゆかり」を求めつづけた源氏の愛で充分補足されていたとも言えようか。結局、その有力なライバル的な女性一人一人が、物語の世界から離れていって、それにもなつて紫の上の地

位というものもしだいに確立していったと言えよう。

6

朝顔の姫君の場合においても、やはり注目したいのは、嫉妬の心があらわれた時の紫の上のしぐさ(態度)であつて、そのしぐさ(態度)とは、彼女の性格と密接につながるものであると思われる。朝顔巻で、紫の上を相手にして、源氏は藤壺の中宮をはじめもろもろの女性の人柄を批評する箇所がある。紫の上については、

君こそは、さいへど紫のゆゑこよならずものしたまふめれど、すこしわづらはしき氣添ひて、かどかどしさのすすみたまへるや苦しからむ。(四八二頁)

と嫉妬の欠点を措いては、藤壺の完全さに近い美質の持ち主のように、源氏から評される。その嫉妬の心を欠点として言えるかも知れないが、その嫉妬の心というものが紫の

上における唯一の欠点と認めることができるならば、一方では、その唯一の欠点だけを身につけている紫の上という女性を、『源氏物語』においての女主人公として、また源氏の正妻として認めることもできるのではないだろうか。そして、その欠点というべき嫉妬の心を表わさないところに紫の上の性格というものがひそんでいると思われる。その性格というものは、葵の上の無事出産に対して、「たひらかにもはた」というように妬みをする六条御息所にくらべてみたら、すぐ分ってくる。また、明石の君が「琴」にすぐれていることを聞いた紫の上が、その「琴」に「手も触れたまはず」というしぐさ、そして朝顔の姫君との交際についても、「色にも出だしたまはず」というしぐさからも、紫の上の性格というものが分かってくる。『源氏物語』の女主人公ともいうべき紫の上に見える、そのようなしぐさ（態度）というものは、彼女の無性格によって、または無垢な性格によってあらわれたものではないかと思われる。

紫の上という女性は、『源氏物語』において少女期から

はじまって、その最期までほとんどその生涯が語られている。明石の君や朝顔の姫君、女三の宮の出現によって、心の悩みは見られたのではあるが、結局は紫の上の地位というものは揺らぐことはなかった。それは、源氏にとって最愛の女性はやはり、源氏の終焉までに依然として紫の上なのであったからである。そして、色好みな源氏の最愛の妻になるためには、そのような「無性格さ」によったしぐさ（態度）というものが、ある程度紫の上には必要なものであったのかも知れない。

注

①『源氏物語二』（日本古典文学全集。小学館）。以下、『源氏物語』本文の引用はすべて同『全集』による。

②「虚心坦懷若紫の一巻を独立物語としてみれば、紫上は明かに独立独歩の女主人公であり、（中略）然し果して紫上は其様に「女主人公」らしく、又「理想的な女性」たるにふさはしく實際作者によって豊に描かれてゐるであらうか。私にはどうも必しもさうとは考へられないのである。」

〔紫上―一つのやや奇矯なる試論―〕「解釈と鑑賞」昭二
十四年8、松尾聡。

「周知のように、紫の上は正夫人ではなく、光源氏の群妾
の一人にすぎない。…」（「紫の上」『源氏の女君』清水
好子、塙新書）。

「しかし、私は、紫の上を『源氏物語』の女主人公とは思
わない。（中略）物語のヒロインとして、紫の上は余りに庇
われすぎていると私は思うのである。（中略）藤壺には、ど
んなにそれ自身完全であつても、どうにもならない大きな
破れが宿命として与えられている。藤壺がヒロインであり、
紫の上がヒロインでないのはその一点の違いである。」

（「紫の上のヒロイン性」『源氏物語私見』円地文子、新潮
社）

③「此寺鞍馬寺歟昔は四十九院ありけり…河原院をなにか
しの院といふ同躰也…」（『河海抄』角川書店）。その他、
靈巖寺、鷹峰寺、岩倉の大雲寺などが指摘されている。

④「紫上の変貌」（『源氏物語の世界』東大出版会）。

⑤「正夫人である左大臣の姫君、葵の上との祝言とは比べ

ものにならない。（中略）祝言らしい祝言もせず、三日め、
心祝いの餅を食べただけの紫の上の場合は情婦との野合
とでもいうべきか。彼女が終生恥とし、引け目に感じたの
はこの点である。」（「紫の上」『源氏の女君』清水好子、塙
新書）。

*その他、参照した文献は次の通りである。

「紫の上の発見」（『講座源氏物語の世界』南波浩、有
斐閣）

「紫上の嫉妬（一）・（二）」（『解釈』昭四十八年2月、
6月、斉藤暁子）

「紫上は光源氏の正妻か」（『人文学報』96、昭四十八年
3、森藤侃子）

「紫の上の妻の座とはいかなるものであつたか」（『国文
学』昭五十五年5、中野幸一）

「不生女」紫上の論」（『文学』昭六十年3、藤本勝義）

「源氏物語の人びと・紫上」（『国文学』平三年5、後藤
祥子）

「紫の上造型論」（倉田実、新典社）

（韓国鮮文大学校教員）